

この歌は、王としての主なる神、「万軍の主」の凱旋歌です。礼拝者は歓呼して主の帰還を祝います。受難節といえども、十字架で殺されたイエス様の復活を忘れないように、困難の中でも、主なる神の勝利を忘れないようにしましょう！ここでは「城門よ、頭を上げよ」とあります。どのような意味なのか分かりにくいのですが、サッカーで日本が対戦相手に得点を取られたとき、中田英寿が「うつむくな、顔を上げろ(?)」と言ったそうですが、伝統的礼拝式で歌われる *sursum corda* を思い起こします。コロナウィルスとその影響で沈みがちな心を主に向かって上げましょう。しかし、毎週 *sursum corda* を歌ってきたローマ・カトリック教会が主日礼拝を閉じているとは！いのちの防衛本能として、怯えてもよいのですが、怯えに囚われてはならないでしょう。

1. *Sursum Corda* (なんじら、心をあげよ) ローマ・カトリックのミサ(聖餐式)の序唱の導入部分の言葉で、その部分を歌う旋律は古代オリエントの影響があるようだ。
2. 「城門よ、頭を上げよ」では、*sursum corda* と少し違う、「城門よ、頭を上げよ」(šə'ū šə'ārīm rāšêkem You gates lift up, your heads!) とはどのようなイメージでしょうか？ 戦いにイスラエルと共に出ていった神の箱の帰還か、目には見えない王としての主のエルサレムへの到来か？ 中世城塞都市のように、橋が跳ね上がるような構造なら理解しやすいが、エルサレムでは周囲を囲む城壁に、黄金の門、羊の門などがあります。通常城門には二枚の門扉があり日の出、日没に開閉されたようです。門の上には櫓がある場合もあります。あるいは、神殿の門なのか？ 古代の跳ね橋のような門なのか？ 栄光に輝く王である主が到来しますが、この方は、今おられ、かつておられ、やがて来たりたもう神(黙示録 1:8)であり、この詩編はユダヤ教の祭儀で日曜日(土曜日?)毎に歌われるようになった(ヴァイザー) そうだ。外敵から街を護り、王なる主を迎える門も永遠のものなのではないでしょうか？
3. すべては主のもの 詩は、すべては主のものであると賛美する 1-2 節と、誰が神殿に入り、礼拝できるかの掟(3-6 節)と主の来臨を歓呼して迎える(7-10 節)の 3 部からなります。米国留学先はリッチモンドのユニオン神学院でしたが、建学の精神はカルヴィン神学を受け継いだもので、「地とそこに満ちるもの/世界(têbêl とそこに住むものは、主のもの)に近いものでした。世界の所有者は「主」なのです。詩篇の最初の言葉は「主のもの」であり、前置詞 *la* が *Yahweh* に頭置されています。大海(諸々の海)や潮の流れ(川)は混沌の象徴ですが、それらのものは、主なる神の創造によって秩序づけられています。前置詞の「上に」は空間的・物理的というより、「支配」を意味しているのでしょうか。
4. 神礼拝者の資格？ どのような人が、主の山シオンに上り、聖所に立つことができるのか？ その手が綺麗で(clean)で、その心(lêbāb 内面)が純潔であり(pure)、その魂が偶像礼拝をせず、偽証、偽りの誓いをしない人です。そのような人は自分の義ではなく、他の何ものでもない、ただ主なる神から祝福を受け取り、義を彼の救いの神から受け取る人であるのでしょうか。それは「主を求める人/ヤコブの神の御顔を尋ね求める人」(6 節)です。生来の性格ではなく、徳でもなく、だれに向かっているかの信仰の姿勢です。記憶によるともう引用したように思いますが、ラインホルト・ニーバーが伝えたという「潔さを求める祈り」を記します。The Serenity Prayer: God grant me the serenity to accept the things I cannot change; courage to change the things I can; and wisdom to know the difference. 神よ、私に潔さを与えて下さい。変えることのできないものを受け入れ、変えることのできるものを変える勇氣と、それらの違いを知る知恵を。